

「満洲」開拓地に注いだ眼差し

——山田清三郎の『私の開拓地手記』——

高 燕 文

- 一、はじめに
- 二、山田の渡満とその創作
- 三、連載テキストとしての『私の開拓地手記』
- 四、『私の開拓地手記』の作品世界
- 五、まとめ

一、はじめに

山田清三郎（1896-1987）と言っても、現在では半ば忘れられた作家となっている。小学校を中退し、さまざまな労働に従事した後プロレタリア文学運動に参加した山田は、『新興文学』を創刊し、『種蒔く人』・『文芸戦線』の同人になり、全日本無産者芸術連盟（ナップ）の結成後、中央委員、『戦旗』編集責任者などを歴任した。「日本プロレタリア文学運動の本流に棹をさし、つねにその運動の中心部に位置を占めてきた」¹と言える山田は、プロレタリア文芸弾圧のため、1934年に治安維持法違反及び不敬罪で検挙され、投獄された。獄中生活を送る間に、日本が戦争状態に突入したことを知るようになる。その後、転向するにいたり、1938年に仮釈放となった。翌年春、「満洲」²へ渡り、満洲の文壇で活躍していた。日本敗戦後、シベリア抑留になり、1950年、日本に帰国した。戦後の山田はプロレタリア文学史と農民文学史の整理に努め、松川事件、白鳥事件などの救援運動で活躍した。

プロレタリア文学運動時期の山田の活躍及びその後の転向は各種の文学事典・研究書の中に時には言及されたが、満洲における山田の諸活動に関する研究が見られないほど手薄である。戦時下、転向して渡満した山田は、その後、満洲新聞社に入職し、文芸部長に

1 思想の科学研究会『共同研究 転向4——戦中篇 下』平凡社、2012年、378ページ。

2 用語の説明：本稿では、「満洲」という表記を使う。引用文内の「満州」はそのまま記載する。以下は、満洲、在満、渡満、満人、満系、満蒙開拓などの関連用語の括弧を省略する。そのほか、作品原文と引用文献の仮名遣いはそのまま記載するが、漢字は新字体に統一する。

なった。1941年に山田は満洲文芸家協会の委員長になり、1942年に武藤富男、和田日出吉などと文芸総合雑誌——『芸文』を創刊した。しかも、彼は自身のプロレタリア文学運動の経験を活用し、「満洲芸文聯盟」の設立を推進した。在満の山田は旺盛な創作活動を展開した。そのほか、『現地随筆』（二冊）³・『満洲国各民族創作選集』⁴の編輯、満系作家との交流、大東亜文学者大会の参加など、山田は満洲の文壇に重要な位置を占めていると言える。

だが、山田は渡満した後、最初の開拓地見学という経歴は忘れられがちである。「帝国」のメディアにより日本人の大陸・満洲への関心・欲望が喚起され、大陸開拓文学が大量にプロデュースされたあの時代に、山田も満蒙開拓に多大な関心を示した。開拓地への見学は、山田の初回渡満の目的で、転向した彼が「新生」を求める行程である。山田は、戦時下、多くの渡満作家の観光コースのような開拓地視察の旅と違い、自らが開拓地の生産・生活を体験した。彼がその滞在中の日記に基づき、雑誌連載を経て、新たな回想を加えて書き上げたのは『私の開拓地手記』⁵（春陽堂書店、1942年）という作品である。そのほか、開拓に関連する山田の作品は文末の作品リスト（附録）で挙げられた何篇以外に、『一粒の米を愛する心』⁶、『北満の一夜』⁷、『満洲国文化建設論』⁸、『老宋』⁹などに収録



（春陽堂書店、1942年初版）



（ゆまに書房、2017年復刻版）

3 『現地随筆』『続・現地随筆』（編輯人：山田清三郎）、満洲新聞社、1943年。

4 川端康成〔ほか〕編『満洲国各民族創作選集 第1』創元社、1942年；川端康成〔ほか〕編『満洲国各民族創作選集 第2』創元社、1944年。

5 以下、『手記』に略称する。

6 大阪屋号書店、1941年。

7 万里閣、1941年。

8 芸文書房、1943年。

9 東亜文化図書株式会社、1944年。

された何篇もあるが、本論は主にこの『私の開拓地手記』を取り上げ、そこに描かれた開拓地風景、人々の姿及びモチーフとしての「民族協和」を探究したい。

二、山田の渡満とその創作

戦時下の関連随筆及び戦後に出版された『転向記』¹⁰によって、山田の満洲への旅は精密な計画をした後行われたものではないということが分かる。獄中から帰った山田は転向の悔しさ、恥かしさ、世間からの冷たい視線及び妻とのもめごとなどの複雑な原因で、東京及び日本に自分の居場所がないと思っていた。日本内地を離れることを決意した後、山田は大陸への報道班・宣撫班の参加を志願したが許可されなかった。最後は渡満することになった直接のきっかけは『転向記』にもあるように、その時、親友・寄本司麟¹¹からの渡満の誘いがあり、満洲国最高検察庁次長に転職した知り合いの元東京保護観察所長・平田勲にも勧められ、最後は保護観察処分を受けたまま、満洲の開拓地へ見学に行くことになった。そのほか、「開拓農村で半歳滞在すると云ふことの動機的一半にはまた旅費の乏しさと云ふことがあった。私は満鉄からバスを貰ふでもなく、どこかの団体や官庁から派遣されたのでもなかった。」¹²という山田自身の話によって、最初の旅行先を満洲の都市ではなく、開拓地に決めた一つの原因は限られた旅費だったという点も抜かすことができないだろう。

『手記』の自序の中に、「私が、満洲開拓農村の視察に赴いたのは、昭和十四年の春で、それから初秋までの数ヶ月を第五次永安屯および第四次哈達河の両開拓団に過ごしたのだった」¹³ (p1) と書いているが、実は、満洲における最初の半年間、山田の見学先は開拓地だけにかぎられていることではなかった。彼は第五次永安屯開拓団（1936年7月に入植）に満二ヶ月（5月19日から7月中旬まで）いた。永安屯にいる間に、隣の第四次哈達河開拓団（1936年3月に入植）に一週間ほど足をとどめ、知人が所長をしている満洲開拓青年義勇隊龍鎮自警村訓練所にも半月いた。あとの多くは新京で過ごし、その他に哈爾賓、虎頭、東安、密山、北安などの町も見てまわった。ちなみに山田が満洲新聞社に入職できたこともこの間に知り合った友人のおかげである。当時、観光化された弥栄村、千振郷ではなく、永安屯という開拓地を選択するのは、そちらに知り合い——名前を聞いた

10 1957～1958年、理論社により出版された『転向記』三部作——〈霧の時代〉、〈嵐の時代〉、〈氷雪の時代〉である。この三部作を通して、山田は自分の生涯を回顧し反省した。

11 山田と同じく京都出身でプロレタリア美術家としては名が知られておる。山田の『私の開拓地手記』の装幀と挿絵の描きを担当した。

12 「満洲への夢 再度の渡満に際して」『知性』3（1）、1940年1月、70ページ。

13 原文引用はすべて初版『私の開拓地手記』（春陽堂書店、1942年）から引用したもので、以下は注釈を省略する。

たことがある——の小学校の先生がいることがその一因である。

「開拓地の真実と全貌について成心や作為をまじへずに来るだけ忠実に伝えてもらいたい」（p1）という友人たちからの期待を負っている山田は、小説の「どこまでが真実や現実で、どこまでが作者の創作であるか判断に苦しむ」（p1）という性格のため、最後に手記の形式を選択した。「その満洲の旅で私は、夢と愛とを拾って来た。満洲には夢があり、満洲は私の胸から、やみ難い愛を引出した」¹⁴という感慨を残した山田の目に映じた開拓地の現地はいかなる状況であるのか。

三、連載テキストとしての『私の開拓地手記』

山田の初回の渡満ルートについて、まとめて言えば、東京——京城——新京——哈爾濱（拓士会館に泊まったことがある）——永安屯、哈達河開拓地（この間、新京に行ったことがある）というものである。前述したように、『手記』という作品は、山田が開拓地滞在期の日記に基づき書いたものである。しかも、単行本として上梓される前、その一部の内容が同題で、『偕拓』¹⁵第4巻第1号（1940年2月）から第5号（1940年7月）に連載されたことがある。そのほか、戦後出版された山田の『転向記』三部作の中にも、開拓地における見聞も述べられたことがある。

以上の内容から見れば、山田の開拓地における体験記録について、滞在期の日記、雑誌連載文章、単行本、戦後の作品収録部分という四つのテキストが存在する。その中、日記が未見で、検討できない。戦後の作品収録は、戦後、山田の再転向で、戦前の体験記録と比べ、添削されたところがあり、ある程度書き直した回顧録になった。このテキストについても、ここで、一応考察の対象から外す。本論は主に単行本のテキスト分析を中心として展開したが、その単行本の先行としての連載テキストについて、まず紹介したい。全体から言えば、掲載誌の『偕拓』は非売品の内部誌で、印刷ミスが多い。連載は数回だけで、単行本として上梓された時、多くの内容が追補された。単行本は「永安屯にて（上）」「永安屯にて（下）」「哈達河団にて」という三部分からなり、連載テキストと異なり、各章の内容は幾つかの小タイトルでまとめられている。以下は連載テキストと単行本の内容との対応関係である。

14 前掲「満洲への夢 再度の渡満に際して」、71ページ。

15 『偕拓』は「満洲拓殖公社」の内部誌で、非売品である。

雑誌連載	単行本
私の開拓地手記（一）	永安屯にて（上） 第一、二章
私の開拓地手記（二）	永安屯にて（上） 第三、四、五章
私の開拓地手記（三）	永安屯にて（上） 第六、七、八章
私の開拓地手記（四）	永安屯にて（下） 第一、二、三章
私の開拓地手記（五）	永安屯にて（上） 第九、十一章 永安屯にて（下） 第四章

他に、視察中の連載ではないが、連載テキストは明らかに日記体で、明確な日付が冒頭部で書かれている。その一方、単行本には、冒頭部の日付が削除され、文末に「五月××」・「六月××」を標注するという形になった。しかも、連載テキストの日付と外れた所もある¹⁶。挿絵のことであるが、連載テキストと単行本共に寄本氏の作品であるが、似ているものは一つしかない。言い換えれば、単行本のほうのために、寄本氏は新たな挿絵を画いた。上述したように、連載テキストに明確な日付が記録されているから、その内容に基づいて、以下のように作者の具体的な日程の一部（5月19日～6月1日）が整理できる。

- 5月19日 寄本氏と永安屯に到着——雇用した荷物運びの満人苦力に案内され、開拓団本部へ行った——本部で団長と会って、団長の家を訪ねた——小学校先生伊藤さんの家（寄宿舎と一緒）を訪ねた——小学校（旧校舎と新校舎）、鍛工場、蹄鉄場、畜産加工場、若草山の永安神社などを見学した——獣医高村氏の家泊まった
- 5月20日 伊藤氏たちと寄宿舎で食事をした——本部の消費組合で郵券を買って書信を書いた——伊藤氏の案内で、病院を見学した——牛乳配りの少年正造君に案内され、寄本氏と種畜場へ行った——種畜場の雨宮主任たちの大豆種まきを手伝った——野天風呂に入った——種畜場に泊まった
- 5月21日 食事——大豆種まきの続きを手伝った——中休みの時、近くの満人部落へ行った——レコードを聴いた——男山を登った——雨宮と群馬部落へ行った
- 5月22日 食事——雨で炬燵に引きこもって、満人の孤児・王少年と話をした——通匪の疑いで捕まえられた二人の満人の審問場面を観た——夜、レコードを聴きながら、開拓民の佐藤老人と話をした

16 例えば、単行本には6月××日に改正されたが、内容から見れば5月29日の内容だと判断できる。

- 5月23日 大豆畑へ行って、播いた種の発育状況を確認した——食堂で全種畜場員たちと食事をした——雨宮氏と一緒に満人街・莫和街へ買い物に行った——満人飯店へ行って、食事をした——近くの公立国民学校・公立国民優級学校へ行って、偶然に会った朝鮮人校長と話をした——近くの満人保公所へ行って、満人保長に会った
- 5月24日 雨宮氏に伴って、満人部落の結婚式に参加した——満人苦力頭の親戚の家に昼休みをした
- 5月25日 佐藤老人の緬羊放牧を観に行った——開拓団の野菜畑へ行って苗植えを手伝った
- 5月26日 雨で雨宮氏の家で『満洲人の少女』という本を読みながら、例の孤児の王少年にまた会った——晴れた後、満人大工と苦力たちの働く場面を観た——大豆畑に行って、大豆の育ちを観に行った
- 5月27日 食事——雨宮氏と一緒に本部へ、学校の授業ぶりを観に行った——木村団長に誘われ、秋田部落の常会に参加した——夜、小学校の寄宿舎に泊まった
- 5月28日 学生の朝仕事、朝礼の行事の状況を観た——開拓団の人々と一緒に、死んだ団員の遺骨を駅まで出迎えに行った——夜、小学校の寄宿舎に泊まった
- 5月29日¹⁷ 寄本氏と一緒に莫和山の満人街へ行った——関岳廟へ行って、満服の僧侶に導かれ、奥の満人女塾のような所を見学した——種畜場に帰り、そこに泊まった
- 5月30日 牛舎へ乳搾りを観に行った——食事をして、緬羊の毛刈りを観に行った——満農の主婦が牝豚をつれて、種畜場の豚のタネをつけに来たから、その風景を観た——伊藤氏の義理の老父が死んだから、寄本氏とのお通夜に参加した
- 5月31日 伊藤氏の義理の老父の火葬行事に出席した——墓地から帰る途中、働いている若い開拓民夫婦を観た
- 6月1日 木村団長に誘われ、東安へ行った——東安で晴明荘農場を見学した——満拓の東安事務所へ行って、末次事務所長に会って、いろいろな話を聞いた

一部の日程であるが、その描写から分かるように、作者は開拓地における自身の活動について細かく記録した。単行本にもその細かさが保持されたが、削除された内容もある。例えば、初めて満洲の大地に着いた作者は、心の不安と寂しさが自然に流れて来た。駅ま

17 注16で挙げられた日付が外れた所である。連載テキストにより、5月29日の内容だと判断できるが、単行本には6月××日に改正された。

で迎えにくる人が誰もいないのを見て、作者は「前の日の朝に、哈爾濱から電報をして置いたのと思ふと若干不安になる」¹⁸と述べた。寄宿舎の粗末さを見て、長期滞在の予定を思っ、作者は「三日四日の視察ではなく来たといふことに何か不安な気も湧いて来た」¹⁹と感慨した。ほかに、東京という大都市から満洲の僻地に来た作者の目から見れば、「灯影がチラホラとさびしく数へられ」、「油煙の匂ひと油煙の小暗いランプの灯が、遠い満洲の奥に来たのだといふ感じを呼びさし」²⁰た。1942年に出版された単行本には、このような不安・寂しさに関する描きが削除された。移民宣伝の必要であるか、或いは、すでに満洲の生活に慣れた作者は意識的にこの最初の真実の気持ちを隠したか分からないが、作品の叙情性が弱まったのは事実である。

このような内容上の添削及び言葉遣いの変りはほかに多くの所があるが、趣旨上の大きな改正がないから、ここで一々に列挙しない。一言でいえば、単行本というテキストは、日記体の連載テキストを整理し直して、未連載内容を加えた作者の再度の創作である。次は、単行本の作品世界に入ってみよう。

四、『私の開拓地手記』の作品世界

1、現地における作者の見聞・体験

この『手記』は作者たちが駅近くの満人飯店から荷物運びの満人苦力を雇用した話から始まる。この苦力の案内で、永安屯開拓団へ向かう途中、まず、作者の目を引くのはその自然風景の美しさである。「眼界の及ぶかぎりひろびろと拡がってゐる」(p18) 新緑の野、「遥かな地平線に浮び上って、二十メートルほどの空に輝いてゐた」(p19) 大陸の朝の日輪、「内地ではまるで想像も及ばない長い畝」(p33) など、狭い日本内地から初めて満洲の曠野に来た多くの人々と同じように、日本内地ではおよそ想像もつかない壮大さを持っている北満の風景は「雄大なる美」として作者に深い印象を残した。『手記』の冒頭だけでなく、作品全体を通じて見ても、このような北満の多彩多変の美しい自然風景は時折作者の心の中の感動を呼んでいる。

しかし、自然風景よりも、作者は北満の野で展開される人間生活に関して、より多くの関心を寄せている。開拓団に到着した作者は、本部、学校、消費組合、種畜場、共同食堂、醸造場などの施設を見てまわった。種まきや羊の毛の刈り取りなどの働きにも参与し、様々な面から開拓地の生活を観察し、体験した。殊に、ドキュメンタリー風の紀行手記であるため、開拓地の多くの実在の人物が実名のまま作品に姿を現している。たとえ

18 『偕拓』4(1)、満洲拓殖公社、1940年2月、124ページ。

19 同上『偕拓』4(1)、127ページ。

20 同上『偕拓』4(1)、128ページ。

ば、開拓団の本部に着いた後、作者の最初の案内役を担当した京都帝大農学部出身のインテリ団長・木村直雄、作者が昔からその名前を聞いた小学校の先生・伊藤信雄²¹、退役軍曹だった種畜場主任・雨宮などが挙げられる。山田が開拓地で体験した生活も主にこれらの人物をめくり展開されている。

伊藤先生の家招待された際の都市人向きの飲料品——ダイビス²²、意外に品揃えがいい田舎の小さな百貨店のような消費組合、団員とその家族たちが一つの食堂に集まって賑やかに食事を共にする雰囲気、野天風呂に入りながら蛙の鳴き声を聞く趣き等々、この大地の上で生計を立てている移民の日常生活に対しても、作者は次々に驚きと感動を覚えている。そのような溢れる感情が行間からはっきりと看取出来る。ここで一例を挙げて見てみよう。

夕陽を浴びながら青々と萌ゆる大豆畑の長い畝に、一組の若い夫婦ものが、中耕の犁丈（リンジャー）を入れてるその姿であった。牛の綱を曳くのは女、犁丈の柄を操るのは男で、女は緋のやうに真赤なジャケットをむき出しに着て、きりりともんぺを穿ち、男は純白のシャツを着、そして二人共つば広の麦藁帽を頭にかぶってゐた。広々とした野に、傾く夕陽を浴びながら、若い夫婦がただ二人して睦じ気に立ち働いてゐるといふこと自身が、私の心をとらへるに充分だった。若い女が、大きな牛を曳いてゐるのも珍らしかつたが、彼等の誰憚るところのない放胆な服装の美に、私は見惚れたのである。（p89）

これは無名の若い開拓民夫婦の働く場面に関する描写である。作者は、自由で広闊たる「満洲新天地」における「解放された若い生命の、自らなる奔放な溢れ」をこの夫婦を通して具象化した。特に、「真赤な単色のジャケットだけで野に出てゐる」若い女性の姿に対して、山田は「これが日本の内地だったら、馬鹿か気狂ひ扱ひにされるにきまつてゐる。ここに満洲の新しい美の創造があり、若返る満洲の新しい文化の芽がある！」（p89）と、自分の想像が打破された後の驚異と感動、及び「新天地」に対する好奇心が満たされた喜びが明確に表されている。ここから、開拓民も転向した自分も満洲に「新生」の発見と探求を賭けるという作者の理想的な憧憬が託されていることが分かる。ちなみに、ここで描かれた風景は、当時の満蒙開拓のプロパガンダで常に登場する「赤い夕陽」、「若い開拓民夫婦が曠野に働いている姿」というイメージとびったり合致する。言い換えれば、これは一種のパターン化されたストーリーで、或る意味では、当時の満蒙開拓イメージに関する日本人の共通的な認識の一面の反映である。

一方、作中に頻りに出て来る「驚き」という言葉だが、その「驚き」の対象は感動をも

21 山田は伊藤と会ったことがないが、その名前を聞いたことがある。伊藤は『北満教育建設記』（大都書房、1941年；永安屯での二年半における小学校教員生活の記録）を著した。

22 カルピスと同種の、畜産加工品飲料である。

たらずこと・ものに限られず、健康美が満ちた若い開拓民夫婦の以外に、開拓地の「暗い一面」も一種の「驚き」を作者に与えるものであった。前述したように、開拓地の真実を忠実に伝えて来るという友人たちからの期待を負っている山田は、開拓地建設の不足点に関して、見た・聞いた瞬間の気持ちをそのままに呟いている。例えば、僻地の開拓地に到着して、真っ先に目に入った建物に対して、東京から来た作者は次のように自分の失望を隠さずに述べた。

開拓団本部：「永安屯開拓団本部」「帝国在郷軍人会永安屯分会」の看板が、双方に雨ざらしになってゐる柱だけの門があって、それをくぐると、二棟の満人家屋風の建物がある。何れも泥塗の、草葺屋根だ……。 (p19～p20)

団長の家：団長の家といっても、新築間もない……小ざっぱりとした感じではあったが、しかしマッチ箱のやうに小さく、粗末なものだった。 (p20～p21)

学校寄宿舎：学生と唯一の先生の一家と共同利用で、外部は泥塗で草葺屋根の「満人家屋風の建物」、内部も満人家屋そのままなのである……寄宿舎の内部は、「冷たく薄暗かった。土間なども、デコボコとしてゐた。天井は、古新聞で貼られ、床に敷き流したアンペラもところどころ破れてゐた。生徒たちの汚ない布団が、窓に寄せて、枕の順にずらりと積んであった。」 (p22～p24)

教室：「自家用自動車の車庫といつても、こんなに粗末なものはまづないだらう。屋根もトタン、壁もトタンだけを張って雨露を遮ぎるだけのなかに、土間に机と椅子を並べ、正面に黒板が懸つてゐる。なるほどたしかに教室にはちがひないが、出入口や戸があるわけではなく、これなら、野外授業と変りがない。」 (p25)

山田が見学に行った永安屯は、当時初期建設中で、多くの建物は原住民から買い取った家屋であった。これらの満人の家屋は、上で列挙したように、「粗末なもの」として作者の目に映っていた。後に種畜場主任雨宮の家（同様に粗末な満人家屋）に宿泊したことも加わり、開拓地の住居環境の悪さは作者の心に深い印象を残した。さらに、開拓地の教育に大きな関心を持っていた山田は、粗末な教室を見て、「ただ唾然とした。言葉も出なかった」 (p25) というような感想を語つてもいる。建設中の赤い煉瓦づくりの新校舎と寄宿舎を見て作者の心は少し和んだが、新校舎は時局による資材難と労力難で竣工がいつになるか、見込みはたたない状態であった。住居環境のほか、新しい農業技術の導入による営農改善の問題、児童教育、婦人教育、保健衛生の問題などについても、作者は自分なりの考えを持っている。時局の変遷、満蒙開拓という農村動員事業の推進上の問題を、この北満の一開拓地から垣間見る。

これらの点から見ても、山田は開拓地の現況に対して、一定の批判的な目を持っていたことは否定できないだろう。だが、作者の目的は単なる視察者の視角でこの開拓地における日本人移民たちの生活を傍観し記述することではない。彼がより大きな関心を持っているのはその日常から、いや、もっと正確に言えば、この北満奥地の多民族空間の存在か

ら、「満洲国」の「建国」スローガンの一つとしての「民族協和」が実現される可能性を発見し、アピールすることである。

2、「民族協和」というモチーフ

日本人移民と現地の原住民たちとの接触は生活の面からも避けられないことは言うまでもない。だからこそ、戦時下における多くの開拓地視察者たちはその作品の中で移民と原住民たちとの接触に言及しているのだ。山田もその例外にはあたらない。だが、ほかの作家と違い、山田は日常生活における移民と原住民との触れ合いを意識的に「民族協和」の枠の中で描いている。そこで働いているのは作家としての冷徹な観察眼ではなく、転向作家としての山田なりの関心ともの見方である。

山田は自身の開拓地への旅について、「ここに日本開拓民の農村がある、ここに日本開拓団の農村が建設された、と云ふだけでは、私は、わざわざ満洲に来て見るまでもない」²³と自分の態度を表明した言葉を残している。『手記』の自序の中で、彼は再度真剣に「遠く異郷に赴いて開拓農村の創設に営為しつゝあるわが日本開拓民の同胞と原住民族との関係や結合の問題は、ことのほか私の関心を唆らずにはゐなかつた」（p3）という立場を表した。このような「民族協和」という問題に対する作者の関心と執念が『手記』の全篇を貫いているのだ。

「何れも興味の対象でないものはなかつたが、さうした裏にも、私は更に、満人との接触と云ふことに心を動かさないではゐられなかつた」²⁴という山田の話が示すように、彼は現地原住民に大きな興味を持っている。それは明らかに先述した関心と執念から生れた「民族協和」の主体の一つとしての原住民を理解しようとする姿勢である。これを前提として、「旦那、辛苦、辛苦呢」・「我辛苦辛苦没有」などの「協和語」を述べた満人苦力、五人八人と列んで広い野に立って悠々と鋤頭で除草をしている満人農夫、開拓地の種畜場で子守りや使走りをしている「小孩」と呼ばれた満人孤児、関岳廟の満服の僧侶、大喰いの老人苦力、商機を見るに敏なる満人商人、挨拶しない開拓地児童と異なる礼儀正しい満系・鮮系児童など、無名の現地の人々の姿が作者の見学の歩みにつれて続々と作品の中に現れたのも理解がつかさうだ。では、これらの原住民たちとの触れ合いを、作者はどのような考え方を持って描いたのだろうか。幾つかの事例を見てみよう。

まずは、作者一行が開拓団の苦力に満人の伝統行事——「娘々祭」に誘われ、その後、苦力の満人親戚の結婚式に誘われたという話が挙げられる。作者は、原住民からの誘いそのものに異常な興奮を示している。このような誘いは作者自身に原住民の風俗習慣を知るチャンスを与えたと同時に、作者にとっては日本人に対する原住民の親しみと歓待の表れ

23 「満洲への夢 再度の渡満に際して」『知性』3（1）、河出書房、1940年1月。

24 「なつかしき満人たち」『文芸春秋』17（24）、文芸春秋、1939年12月。

と感じられたのだ。特に、結婚式中、立食の宴席ではなく、隣家の屋内に設けられている別席に案内された作者一行は「自分が階級の高い客」だという自尊心を満たされた。婚礼の華銭（祝儀）の計算を手伝いにきた若草部落の部落長・鈴木を見て、作者は「私のうれしかったのは、かういふ場面に見出される原住満人と、日本開拓民の自然な親和の姿であった。これは一つの小さな事実でしかないかも知れない。しかしそれは、誰かが強ひたものではなく、日常生活の接近のなかから期せずして生れ出たものである」（p64）というような感想を述べている。その日の話は「生きた民族親和のすがたであり、同時に満洲の建国精神とうたわわれている民族協和の可能性をしめすもの」として作者の心に深く刻まれた。

もう一つの例であるが、作者は開拓村の近くの晴明荘農場へ見学に行き、そこですべての生活を満人の苦力たちと共にしている遠藤君のことを耳にした。作者は「満人たちも、さうした遠藤君にすっかり親しみ、信頼もしてゐて、労賃の問題なども遠藤君に一任して、みんな真面目によく働いてゐる」（p111）と自分の感心を述べている。そのほか、死んだと思われ捨てられた満人の赤ちゃんを救った開拓地の医者・福地氏が「神様のやうに満人の間に信頼されていた」ことに対して、作者は「民族協和を地で行くわけですね」と感慨を深めた。以上の例が示すように、開拓地の日本人と原住民との数えるほどしかない日常生活の接触・交流は、作者の筆によって各民族の人々の「民族協和」という理念への共鳴のもとで、その達成のために注がれた努力として、「民族協和」が実現する可能性を見せる「美談」として示唆されているのだ。

だが、この「親和」の裏に何があったのか。幾つかの事実を述べてみよう。団の春祭りに、道路工事の賦役等の労をねぎらうため、屯の満人たちを招待することになり、その案内状を部落の牌長（組長）に届けるため、作者と種畜場の雨宮主任は満農の屯子に向かった。銃を肩にしていた雨宮と協和服を着ていた作者を見た幾人かの女や子供たちが、恐怖と警戒心から急に慌しく奥へ姿を消してしまった。満系を対象とした愛林表彰の大会であり、被表彰者が二十幾名を数えたのにも関わらず、僅かに数人しか大会には姿を現さなかった。また、日本人の報復を怖がって²⁵ 村公所を不在にするという嘘をついた劉保長に対して、作者の案内役を担当した日本人開拓民部落長の威嚇的な態度がついに露呈した。開拓民の入植のために、多くの朝鮮人農家は開墾した水田を失い、他に換地を与えられ移動を強いられたのである。

ここで挙げたように、多民族が共存している空間に存在している「暗い一面」についても作者の視線は注がれている。しかし、これらの事実に対して、作者は細やかな疑惑と不快感を覚えているが、その描写は報告レベルにとどまっている。その事実の後ろに隠されている民族利益の相剋及び支配と被支配との格差が孕んだ「調和が取れない事実」につ

25 保長は「満人」飯店の店長に、開拓民の店内の無銭飲食のことを警察に密告させたからである。

いて、作者は明らかにはっきりとした理解を持っておらず、その筆もそこまでは届かなかった。

もう一つ見落としとしてはいけない点がある。それは文中に協和服姿の作者の登場である。「協和服」という言葉の二回の現れ以外、山田は文中に自分の身なりに関する描写はほとんどない。前述した連載テキストの冒頭部に、「私たちは、東京でつくった協和服の合服に軽いレインコートを着てゐたが」²⁶という句に、「協和服」という言葉が初めて登場した。単行本にこの描写が削除されたが、戦後の『転向記』によると、山田と寄本は東京で作った協和服を着て満洲の開拓地へ行ったのは事実である。その後、上述したように、満農の屯子へ行ったことを描く時、「協和服」が二回目に登場した。銃を肩にしていた雨宮と協和服を着ていた作者は、「威嚇」と「協和」との微妙なバランスを維持し、そこから日本人の満洲統治策の二面性が分かるだろう。文中に「協和服」が作者の心に明らかに「民族協和」という理念の象徴になった。

多民族の農民同士が開拓地という空間で率先して「民族協和」を実現するという方向性を是認しているからこそ、作者の目は最初からそのほとんどが「民族協和」の面に注がれていて、その協和の達成に執念を燃やしている。したがって、作者は開拓地の「暗黒さ」を見逃さなかったが、その描写は不自然な方向に流れ、「民族協和」への一時的な障害が存在しても、努力すればそれは解決でき、「協和」も達成できるという甘い憧憬に帰着してしまったのだ。このような描写は「現実の問題もさることながら、開拓地の将来の展望といふことを私は忘れることができなかつた。もしもそれらのことが、この著で多少共ひるく注意と理解をよび起すことができるならば、これにすぎた私の本懐はないのである」(p3)という作者自身の創作目的とも合致するといえる。

五、まとめ

『手記』の単行本が出版された1942年は、山田の開拓地への旅の行程と、約3年の時間差がある。この間の資料の不足で、作者がどこまで内容の添削をしたのか分からない。1942年、山田はすでに満洲文芸家協会の委員長になっていた。彼の立場を考えると、彼がその間の見聞や体験をすべてこの作品に忠実に描くのは不可能だろう。それゆえ、『手記』の記述に一種の限界が生まれているのも想像がつく。

例えば、作品において、現地の下層の満人たちに向けた作者のプロレタリア転向作家としてのまなざしは否定できないが、彼らをめぐる出来事を述べる時、作者の「日本人としての優位意識」が随処に見えること。一見して、各種の満人を描いたが、大喰いで笑われた老人苦力、通匪の疑いで捕まえられた満人苦力、雇用労働力としての満人農夫、満人孤

26 前掲『偕拓』4(1)、125ページ。

児、肥満の満人僧侶、日本人を怖がる満人の婦人・子供など、登場した満人は概して「弱者」・「下層」につながっている。その対照として、満人孤児に日本語の勉強を指導する作者、苦力の働きを監督する遠藤、死んだと思われ捨てられた満人の赤ちゃんを救った医者・福地、満人を威嚇する雨宮及び部落長など、現れた日本人は明らかに「指導者」・「強者」の立場に立っている。作者の認識上の「民族協和」が、日本人移民が指導民族と目されることを前提とする協和であるということは言うまでもないだろう。言い換えれば、作者の認識は当時の満洲・満蒙開拓に関する共通した言説の枠を超えることができなかったのだ。だから、「満人」の屯子に行って、「やはり何となく不潔な感じで、近づくともう一種異様な臭気が鼻に来た」(p39)という感じを無意識に表して、同時期の作品にいわゆる科学的な立証を挙げて日本人の先天的な優越性を主張し、「在満日系が、わが満洲国の指導民族たり得るためには」²⁷という論述を残した山田の心像風景が納得できるだろう。

ちなみに、北満開拓地の見学以外に、山田はその後、南満へ行ったことも、関東軍報道演習芸芸班に参加し現地視察したこともある。日本人の思想運動・農民運動からの転向者が指導した「北満型合作社運動」にも多大な興味を寄せていた。ここからも彼の「民族協和」に対する執着心が伺える。今後の研究では、プロレタリア運動から転向後渡満し、満洲に生きて、敗戦後のシベリア抑留を経て帰国したという山田の波乱万丈の生涯を詳しく考察し、彼の同時期の他の創作も取り上げ、同時代の作家たちの開拓文学作品との比較も視野に入れながら、『手記』という作品に関して、より深いテキスト分析を展開するつもりである。

附録 山田清三郎の雑誌掲載作品リスト（「満蒙開拓」相関）

- (1) 「車窓の北満」『新満洲』3（8）、満洲移住協会、1939年8月
- (2) 「詩 麦秋」『新満洲』3（9）、満洲移住協会、1939年9月
- (3) 「龍鎮日記」『新満洲』3（10）、満洲移住協会、1939年10月
- (4) 「現地報告 開拓地に於ける現実的な問題（新京にて）」『政界往来』11（1）、政界往来社、1940年1月
- (5) 「現地青少年義勇隊の聲」『大陸』（2月号）、改造社、1940年2月
- (6) 「私の開拓地手記」『偕拓』4（1）～4（5）、満洲拓殖公社、1940年2月～7月
- (7) 「北満の一夜」『芸芸』8（3）、改造社、1940年3月
- (8) 「現地小説 若草山」『新満洲』4（4）、満洲移住協会、1940年4月
- (9) 「義勇隊と文化の問題に就て」『新満洲』4（11）、満洲移住協会、1940年11月
- (10) 「春耕期」『満洲観光（聯盟報）』6（3）、満洲観光聯盟、1942年3月
- (11) 「南満の農村を訪ねて（満洲通信）」『現地報告』10（8）、芸芸春秋社、1942年8月
- (12) 「大陸婦農開拓団を觀る」『芸芸春秋』20（9）、芸芸春秋、1942年9月
- (13) 「生産文学よ興れ：興農・増産運動の基本精神」『芸文』2（5）、芸文社、1943年5月

27 『満洲国文化建設論』芸文書房、1943年、149ページ。

- (14) 「南満屯子の春節」『続・現地随筆』(編輯人：山田清三郎)、満洲新聞社、1943年8月

参考文献

- (1) 山田清三郎「現地生活を志願するの書」『革新』1(3)、革新社、1938年12月
(2) 山田清三郎「なつかしき満人たち」『文芸春秋』17(24)、1939年12月
(3) 山田清三郎「現地報告：開拓地に於ける現実的な問題—新京にて—」『政界往来』11(1)、政界往来社、1940年1月
(4) 山田清三郎「満洲への夢 再度の渡満に際して」『知性』3(1)、河出書房、1940年1月
(5) 山田清三郎『私の開拓地手記』春陽堂書店、1942年
(6) 『満洲国文化建設論』芸文書房、1943年
(7) 山田清三郎『転向記 霧の時代』理論社、1957年
(8) 山田清三郎『転向記 嵐の時代』理論社、1957年
(9) 山田清三郎『転向記 氷雪の時代』理論社、1958年
(10) 植民地文化学会『植民地文化研究』不二出版、2002～2020年
(11) 植民地文化研究会編『「満洲国」文化細目』不二出版、2005年
(12) 思想の科学研究会編『共同研究 転向』(東洋文庫)平凡社、2012～2013年
(13) 西田勝など『近代日本と「満洲国」』不二出版、2014年
(14) 喜多恵美子「転向美術家と「朝鮮」「満洲」：村山知義・寄本司麟を中心に」『あいだ／生成』(6)、2016年3月
(15) 山田清三郎・伊藤信雄『私の開拓地手記・北満教育建設記』(復刻版)ゆまに書房、2017年
(16) 岡田英樹『「満洲国」の文学とその周辺』東方書店、2019年